

国語通信

はまなす



令和8年 4月 NO. 1

今年度の部会研究の始まりにあたり

石教研国語（小）部会
部長 鹿島 美穂子

令和8年度も、石教研国語（小）部会へ登録していただきありがとうございます。

昨年度は、『生き生きと学びながら資質・能力を身に付けられる国語科授業の創造～「読むこと」教材における言語活動や学習計画の工夫を通して～』を研究主題に、2ヵ年計画の1年次として研究を進めました。各市町村で「個別最適」に焦点を当てて授業研究を行っていただき、文学的文章教材における、「個別最適な学び」の取り入れ方の工夫を、様々な視点からとらえることができました。

2年次となる今年度は、「協働的な学び」に焦点を当てて研究を進めていきます。文学的文章教材において、効果的な「協働的な学び」を取り入れることで、子どもたちが考えを深めたり、主体的に学習に取り組んだり、大いに成果が期待できると考えます。また、昨年度、実践を積み上げた、「個別最適な学び」との一体的な充実を図ることで、より資質・能力が身に付くと考えられますので、昨年度の成果を生かして授業研究に取り組んでいただければと思います。

なお、今年度も、7月10日に、淑徳大学教授、青山由紀先生による理論研修会を予定しています。詳細については決まり次第ご連絡しますので、ぜひご都合をつけてご参加いただければ幸いです。

今年度の研究が始まりますが、部会員の皆様におかれましては、様々な場面で、それぞれのお立場から、部会の研究活動に変わらぬお力添えをいただければと思います。私たち事務局も、これまで以上にわかりやすい部会運営と情報の発信に努め、部会の大切な共同研究に微力ながら貢献して行く所存ですので、ご理解とご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

1 令和8年度 役員・推進委員・教育課程委員名簿

【役 員】

役 職	役 員	学 校 名
部 長	鹿 島 美 穂 子	江 別 市 立 江 別 第 二 小 学 校
副 部 長	佐 藤 優 佳	江 別 市 立 江 別 太 小 学 校
事 務 局 長	澤 飯 聡 人	恵 庭 市 立 若 草 小 学 校
事 務 局 次 長	岡 田 帆 乃 佳	石 狩 市 立 南 線 小 学 校
研 究 員	村 井 彩 夏	千 歳 市 立 信 濃 小 学 校
教育課程代表	太 田 千 穂	北 広 島 市 立 東 部 小 学 校

【推進委員】

市町村	推進委員・連絡員	推進委員学校名
千歳市	武田 大士教諭	千歳市立桜木小学校
恵庭市	下村 真弓教諭	恵庭市立恵庭小学校
北広島市	佐藤 優衣教諭	北広島市立東部小学校
江別市	口岩 竜馬教諭	江別市立中央小学校
石狩市	石川 知実教諭	石狩市立緑苑台小学校
当別・新篠津	山下 眞紀子教諭	当別町立西当別小学校

【教育課程研究委員】

任期（年度）	選出サークル	氏 名	学 校 名
9年度	千歳	畑瀬 洵子教諭	千歳市立日の出小学校
9年度	恵庭	河野 恵未教諭	恵庭市立恵庭小学校
8年度	石狩	本間 里彩教諭	石狩市立厚田学園
9年度	江別	土谷 颯教諭	江別市立中央小学校
8年度	北広島	林 由佳教諭	北広島市立双葉小学校

2 次年度役員選出について

役員	選出サークル
① 研究員	恵庭サークルから1名選出
② 事務局次長	北広島サークルから1名選出
③ 教育課程委員会	石狩・北広島サークルから1名を教育課程代表（任期1年）

－役員のつながりと任期について－

研究2年毎	2023 R5	2024 R6	2025 R7	2026 R8	2027 R9	2028 R10	2029 R11	2030 R12	2031 R13
部長	岩崎	福島	鹿島	鹿島	佐藤	千歳3	恵庭4	石狩5	北広島6
副部長 (研究計画作成)	福島	鹿島	湊	佐藤	村井	恵庭4	石狩5	北広島6	江別7
研究員	鹿島	北広島1	佐藤	村井	恵庭4	石狩5	北広島6	江別7	千歳8
事務局長	阿部	藤原	熊谷	澤飯	岡田	北広島D	江別E	千歳F	恵庭G
事務局次長	藤原	熊谷	澤飯	岡田	北広島	江別E	千歳F	恵庭G	石狩H
教育課程委員会代表	松田	佐藤	矢萩	太田	石狩・北広	江・千・恵	石狩・北広	江・千・恵	石狩・北広

- ・研究員（任期1年）を経た後、副部長（任期1年）を務め、部長（任期1年）を務めます。つまり、研究員→副部長→部長の3つの役職をする場合は3年間努めることになります。また、事務局次長（任期1年）を経た後、事務局長（任期1年）を務めることになります。つまり、事務局次長→事務局長の2つの役職をする場合は、2年間努めることになります。
- ・教育課程委員長は、各サークルの教育課程委員の任期を終えた方が務めていただくこともあります。
※当別・新篠津は人数が少ないので輪番に入れません。

国語（小）部会研究計画

I. 研究主題

生き生きと学びながら資質・能力を身に付けられる国語科授業の創造
～「読むこと」教材における言語活動や学習計画の工夫を通して～

II. 研究目的

1. 主題設定の理由

(1) 研究の経過

第28期（令和2年～令和4年度）

「考えの形成につなげる新しい時代の国語教育」

- ①「読むこと」領域の「構造と内容の把握」「精査・解釈」の段階で、全体を見渡して大まかな構造や内容を捉えた上で焦点化して授業を進めていく研究を進めた。
- ②文章理解を高めるために効果的な「主体的・効果的で深い学び」の視点に立った指導計画の重要性について確認することができた。

第29期（令和5年～令和6年度）

「資質・能力を育成する言語活動の創造」

～話すこと・聞くこと教材における「言語活動」の効果的な活用を通して

- ①「内容・構成の検討」「考えの形成」における「話すこと・聞くこと」を高めるための指導事項を、授業場面の中でどのように位置付けていくかを研究した。
- ②適切な言語活動を設定することで、「主体的・対話的で深く学ぶ」姿が見られ、「話すこと・聞くこと」の資質・能力を高めることにつながった。

第29期は、「話すこと・聞くこと」領域の思考力・判断力・表現力等の資質・能力の育成に関わる言語活動の研究を進めてきた。各サークルの実践では、様々な取組により、主体的に話したり聞いたりする児童の姿が見られ、「話すこと・聞くこと」領域における言語活動の在り方として、一定程度の成果が得られたと考える。

(2) 主題について

学習指導要領の国語科の目標は以下の通りである。

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 日常生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。
- (2) 日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。
- (3) 言葉がもつよさを認識するとともに、言語感覚を養い、国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

「記録・要約・説明・論述・話し合い」といった言語活動を発達段階に応じて充実させることが重要であるとされており、「教える授業」から「学び合う授業」への転換、協働によって考えを広げたり深めたりすることを通して、思考力・判断力・表現力等という資質・能力を育成していく授業が求められている。

前述したように、第29期の研究では、「話すこと・聞くこと」領域に焦点を当てて研究を進めたが、各サークルの授業実践の中で、様々な言語活動を通して児童が主体的に生き生きと話したり聞いたりする姿が多く見られた。児童が「話したい」「聞きたい」と思えるような教材選定や言語活動の設定、学習計画の工夫が行われ、児童が主体的・対話的に深く学ぶ姿につながったと考えられる。

令和3年に中教審答申によって示された、「個別最適な学び、協働的な学び」についての研究が進んでいる。「個別最適な学び」とは、児童が主体的に学習課題を設定したり、学習が最適となるように調節したりして自律的に学ぶことである。「協働的な学び」とは、多様な他者との対話を通して深く学ぶことである。つまり、「個別最適で協働的な学び」とは、「主体的・対話的で深い学び」の実現の手段であるといえる。

以上の点を踏まえると、各学年における国語科の指導事項に即して、児童にとって魅力的な言語活動・学習計画の工夫や、個別最適で協働的な学びを手段として講じることで、「主体的・対話的で深い学び」につながり、資質・能力が育まれると考えられる。

第30期では、教科書の改編に伴い、まだ石教研国語（小）部会として研究が進んでいない「読むこと」領域の「文学的文章教材」において、子どもの資質・能力を育成するために、主体的・対話的で深い学びについて、部会員と力を合わせて研究を進めていきたい。そのためには、第29期で培った児童にとって魅力的な言語活動や学習計画の工夫と、「個別最適で協働的な学び」を取り入れることが必須である。そうすることで、生き生きと学びながら資質・能力を身に付ける児童の姿が期待できると考える。

令和7年度は2ヵ年計画の1年次目として、国語科における「個別最適な学び」について理論と実践の両面から大きな成果を得ることができた。2年次目となる令和8年度は、1年次目の研究を踏まえ、「協働的な学び」の工夫について授業実践を通して検討していきたい。また、今日の教育課題の一つとして挙げられるICTの活用についても、効果的な方法を模索し活用が図られることを期待する。

なお、国語科における「個別最適な学び」「協働的な学び」「対話」の例を以下に示した。今後も指導計画を立てる際に位置付けていきたい。

国語科における個別最適な学び

児童一人一人の興味・関心、理解力、学習スタイルに応じて、指導方法や教材、学習時間を調整し、主体的に言語能力を育む学習場面の設定

〈例〉指導の個別化、学習の個性化（興味・関心に応じた学び方の選択）等

国語科における協働的な学び

児童がペアやグループ活動を通じて、意見交換、対話、相互評価を行い、言語能力や思考力を高め合う学習場面の設定

〈例〉多様な解釈や表現に触れて自己の考えを広げる、対話を通じた物語の深い読み、物語の主題についての考えを互いに助け合いながら考える活動 等

国語科における対話

単なる話し合いにとどまらず、筆者や登場人物、あるいは自分自身の内面と向き合い、視点を広げることで、主体的に本質を理解する活動

〈例〉対話する必然性のある課題設定、学習内容に応じたグループサイズ（ペア→グループ→全体等）の運用、情報の取捨選択、話を聞き合える関係性の構築

2. 目指す子ども像

- (1) 学習のゴールに向かう言語活動を通して主体的に学習を進める子ども
- (2) 自己の能力に合わせて自律的に学び、対話を重ねて協働的に学ぶ子ども

3. 研究仮説

言語活動や学習計画を工夫し、個別最適で協働的な学びを促すことを通して、国語科における資質・能力が身に付くだろう。

Ⅲ. 研究内容

1. 研究領域

「読むこと」領域の「文学的文章」における「精査・解釈」「考えの形成」の場面

2. 研究の柱

- (1) 児童にとって魅力的な言語活動の設定の工夫
- (2) 「精査・解釈」「考えの形成」の場面における「協働的な学び」の工夫

3. 教育課程研究

教育課程委員研修会において、第30期研究の一環として、第二次研究協議会で扱う教材以外についての「指導事例」を試作し、部会員に配付する（予定）。

Ⅳ. 研究方法

- 1. 令和7・8年度の2ヵ年計画で行う。
- 2. 中心サークルを設け、石教研第二次研究協議会において授業提言を行う。ただし、各市町村第二次研究協議会における授業公開及び石教研第二次研究協議会での提言を行う学年と教材については、「読むこと」領域における「文学的文章」から選び、次の表にまとめた。なお、授業を行う学年の指定は行わない。

学年	教 材 名	言 語 活 動 例
1 年生	やくそく・くじらぐも・たぬきの糸車 ずうっと、ずっと、大すきだよ	○本や文章を楽しんだり、想像を広げたりしながら読むこと ○物語の読み聞かせを聞いたり、物語を演じたりすること
2 年生	ふきのとう・スイミー・お手紙 みきのたからもの・スーホの白い馬	○物語を読んで感想を書くこと ○読んだ本について、好きなところを紹介すること
3 年生	春風をたどって・まいごのかぎ ちいちゃんのかげおくり・三年とうげ モチモチの木	○物語や詩を読み、感想を述べ合うこと ○紹介したい本を取り上げて説明すること
4 年生	白いぼうし・一つの花・ごんぎつね 友情のかべ新聞・スワンレイクのほとりて	○必要な情報を得るために、読んだ内容に関連した他の本や文章等を読むこと
5 年生	銀色の裏地・たずねびと やなせたかし―アンパンマンの勇気― 大造じいさんとガン	○伝記を読み、自分の生き方について考えること ○本を読んで推薦の文章を書くこと
6 年生	帰り道・やまなし／イーハトーヴの夢 ぼくのブック・ウーマン・海の命	○本を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすること

- 3. 各市町村サークルは、主題の解明を図るために、以下の要領で部会研究を進める。
 - (1) 授業学年の各教材について、「どの教材でどのような言語活動が適当か」を、児童の実態を鑑みながら検討し、年間指導計画を作成する。
 - (2) 年間指導計画に沿って、公開授業単元の学習構成を検討する。
※指導案の指導計画に「個別最適で協働的な学び」「主体的・対話的で深い学び」についての記述を加える。（詳細は「研究ガイド」）
 - (3) 授業公開後、事後研をもち、提言をまとめる。
※年間指導計画、指導案形式、提言の形式については新年度発行の「研究ガイド」に掲載する。

4. 実技・理論研修会を開催し、日常の実践に生きる学習の場を設定する。
5. 「各学年の指導事項」を作成し、年間指導計画作成の際に役立てられるよう、ホームページにも掲載する。

V. 研究体制（組織・運営）

1. 令和8年度を中心サークルは、千歳市とする。令和9年度は、恵庭市とする。
2. 分科会構成は、低・高の2ブロックとする。分科会での研究協議は、中心サークルの授業提言の他、各市町村サークルの提言を主とするが、個人レポート提言も受け付ける。また、分科会協議の深化を図るため、各市町村の提言状況やレポート数によって時間配分を考慮する。
3. 推進委員研修会（部会役員・各市町村の推進委員）を組織し、研究計画の具体化や石教研第二次研究協議会の運営等について協議する。
4. 定期的に部会報「はまなす」を発行し、研究内容や各種研修会の周知等に努める。
5. 「研究ガイド」を発行し、部会研究の取組の向上と焦点化を図る。

VI. 年間計画

時期	研修会名・事業名	内 容
4 月	石教研専門部会第一次研究協議会・役員研修会	研究計画，研究体制の確認
	「はまなす」No.1 発行	年間指導計画様式
5 月	役員研修会，推進委員研修会①	各市町村提言予定状況の確認
6月上旬	「はまなす」No.2 発行・研究ガイド発行	各市町村提言予定状況，部会事業計画，サークル便り交流，第二次研究協議会に向けて提言の仕方提示
7 月	推進委員研修会②，役員研修会	第二次研究協議会開催要項検討
	実技理論研修会（予定）	
9月上旬	「はまなす」No.3 発行	第二次研究協議会開催要項
10 月	第二次研究協議会拡大推進委員研修会	第二次研究協議会開催要項確認
	石教研専門部会第二次研究協議会	授業提言，分科会交流
11 月	推進委員研修会③，役員研修会	第二次研究協議会交流，アンケート見解検討，『石狩の教育』原稿検討
	「はまなす」No.4 発行	アンケート集約，見解
12 月	役員研修会	次年度研究内容の立案・検討
1 月	推進委員研修会④，役員研修会	次年度研究計画案内容検討
	「はまなす」No.5 発行	次年度研究計画案提示
2 月	推進委員研修会⑤，役員研修会	次年度研究計画案意見集約・検討，修正
3 月	「はまなす」No.6 発行	次年度研究計画決定版・教育課程委員検討内容

教育課程委員研修会については、随時開催する。